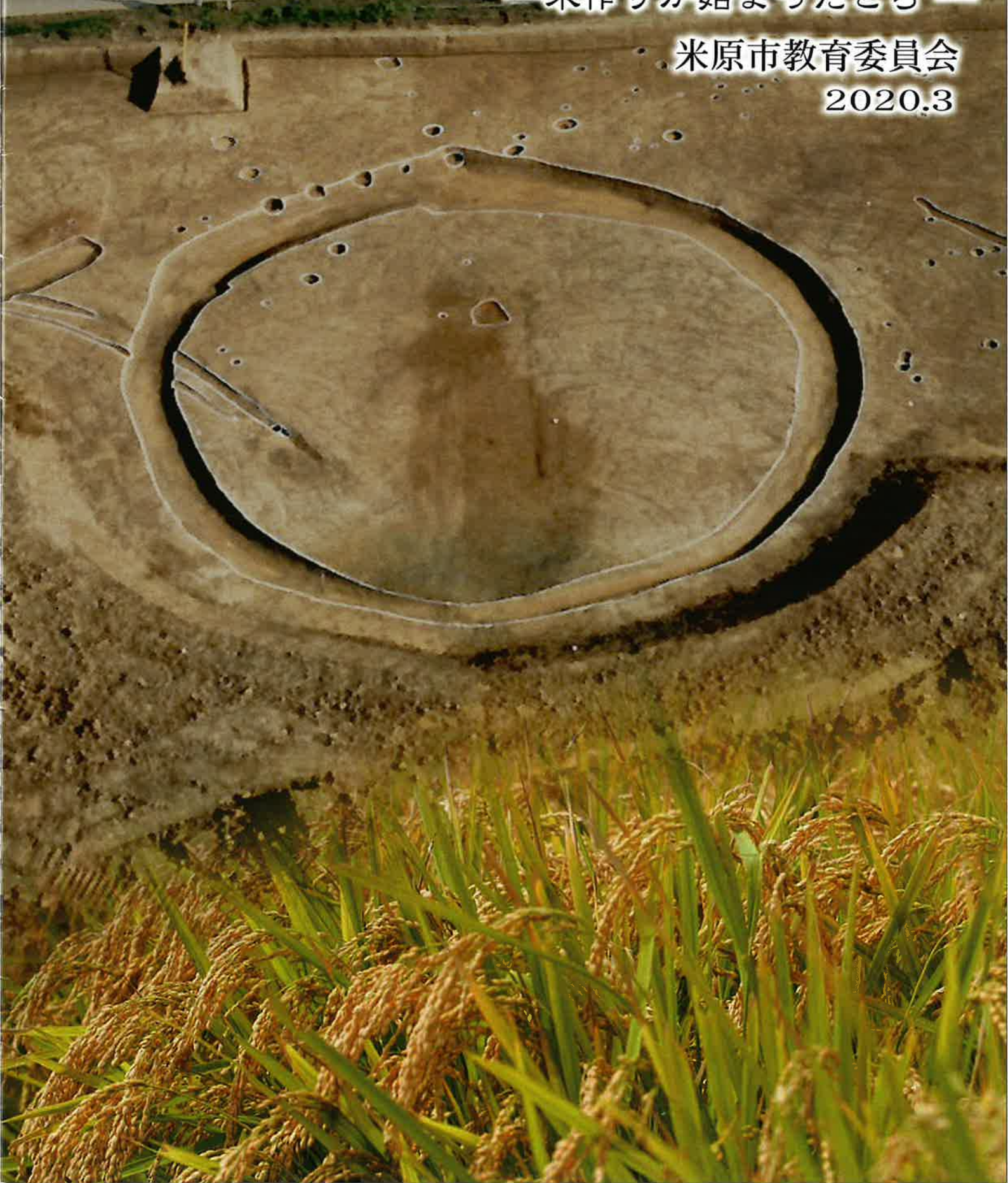


米原の弥生

—米作りが始まったころ—

米原市教育委員会

2020.3



米原の弥生

—米作りが始まったころ—



弥生時代 時期区分	前期		中期				後期	
	Ⅰ期		Ⅱ期	Ⅲ期		Ⅳ期	Ⅴ期	
	前半	後半		前半	後半		前半	後半
年代	BC 7~6 世紀	BC 6~5 世紀	BC 4 世紀	BC 3 世紀	BC 2 世紀	BC 1 世紀	AD 1 世紀	AD 2 世紀

近畿の弥生時代年代(2003春成秀爾作成)

目次

- はじめに —弥生時代の年代観—1
- I 米作りが始まったころ2
 - i 日本列島にやってきた米作り2
 - ii 滋賀県にやってきた米作り2
 - コラム：服部遺跡(守山市)2
 - iii 米原にやってきた米作り3
 - コラム：川崎遺跡(長浜市)3
 - iv 縄文から弥生へ5
 - v 初めのころの米作り5
- II 米原の弥生遺跡6
 - i 前期の遺跡6
 - ii 中期の遺跡6
 - iii 後期の遺跡6
 - iv 天野川中流域の遺跡7
 - v 山間部の状況7
 - vi 長浜平野の様相8
 - vii 弥生時代の地域交流8
- III 弥生人の暮らし —生業の復元—9
 - i 農 耕9
 - ii 狩 猟9
 - iii 漁 撈9
 - iv 工 芸10
 - v 玉造り10
- IV 弥生人のまつり11
 - i 水辺のまつり11
 - ii まつりの道具11
 - iii 弥生人の絵11
- V 首長の出現 —周溝墓から古墳へ—12
 - i 共同体の成熟と統率者12
 - ii 方形周溝墓の築造12
 - iii 前方後方形周溝墓の出現13
 - iv 円形低墳丘墓の出現13
 - v 息長古墳群の成立13
- VI 東アジアのなかの北近江14

はじめに —弥生時代の年代観—

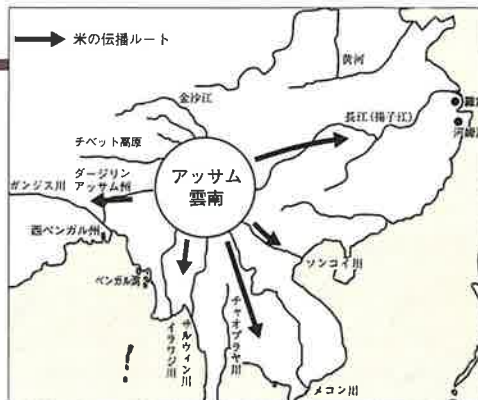
1996年4月27日付けの朝刊各紙で、池上曾根遺跡(大阪府和泉市・泉大津市)で発見された弥生時代中期後半の巨大な高床式大形建物の柱のひとつが、年輪年代測定法によって紀元前52年に伐採されたものであることが一斉に報じられました。考古学によって築き上げられてきた弥生時代中期の年代観が100年さかのぼった瞬間です。このことは、のちに弥生時代のはじまりや、前方後円墳の出現時期に関する研究にまで影響を及ぼしてきました。東アジア全体を取り巻く大きな歴史の渦巻きのなかで、日本の弥生時代後期から、つぎの古墳時代前期までは、古代国家形成の萌芽期といわれます。ここでは、村から国へ、古墳の出現とその展開、土器や金属器などを通じた周辺地域との交流などの論究が進められてきました。米原では湖岸地域を中心に、県内でもいち早く米作りが始まりました。これまでの発掘調査の成果から、米原の弥生人の暮らしや信仰を紹介します。

※弥生時代の年代観については、従来は紀元前4世紀～紀元3世紀後半と考えられていましたが、自然科学的年代測定法の進展などにより、現在は諸説あります。

I. 米作りが始まったころ

i 日本列島にやってきた米作り

弥生時代は、縄文時代までの「狩猟採集」の生活から、備蓄に耐え、必要なときに必要な分だけとり出して食べることができ
る稲作が生活の中心になりました。稲作文化の起源は、インド
北東部のアッサム丘陵から中国南西部の雲南高地にあるといわ
れます。日本に伝わったルートとして、華南(南方)ルート、華
中(江南)ルート、華北(北方)ルートが考えられますが、華南ル
ートの河姆渡遺跡(浙江省)は紀元前4780年頃と、日本の弥生時
代開始年代とは大きな年代差があり、朝鮮半島を経由して、対
馬・壱岐の島々を伝って玄界灘沿岸の平野部に到達した華北ル
ートが最も有力視されています。



米作りのふるさと(『長浜市史』より)



稲作の伝播ルート(『ムラの変貌』より)



弥生文化の東進(『長浜市史』より)

ii 滋賀県にやってきた米作り

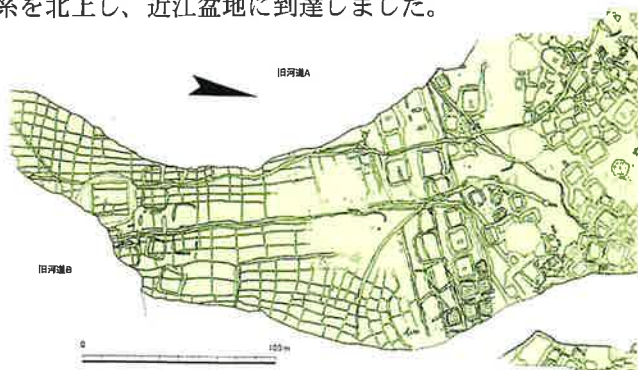
日本で最初の米作りは北部九州で始められました。板付遺跡
(福岡県)や菜畑遺跡(佐賀県)では水田跡がみつかり、当
初から水稲栽培がおこなわれました。その立地は平野で、水は
けの悪い河川の自然堤防の背後の後背湿地か沼沢地に人工的な
小水路や水田を営み、濠を巡らせた環濠集落をもちます。土器
は甕・壺・高坏の基本セットがそろっていました。この稲作技
術や生活様式は、またたくまに適地をもとめて伝わり、お
よそ半世紀足らずで東海地方西部まで広がりました。その
ルートは、北部九州から日本海側を東進し、若狭湾沿岸に
到達した北回りルート。四国の南、太平洋沿岸に回りこむ
南回りルート。中国・四国地方の瀬戸内海沿岸を経由して
大阪湾にいたるルートがあります。ここからさらに淀川水
系を北上し、近江盆地に到達しました。



北部九州の弥生遺跡(『長浜市史』より)

◇コラム 服部遺跡(守山市)

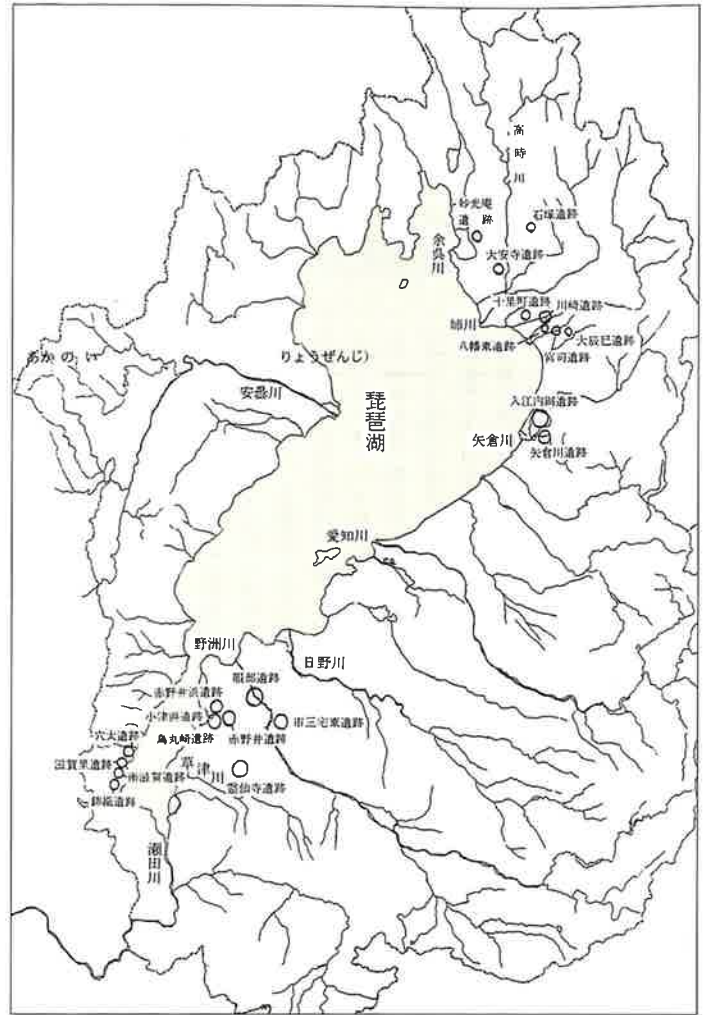
野洲川改修工事に伴い、昭和49年から5
年間、延べ5万人を投入して発掘調査がお
こなわれました。近畿で初めての発見とな
った弥生時代前期の水田跡、中期の360基
にのぼる方形周溝墓群、後期の環濠集落の
ほか、縄文時代、古墳時代から平安時代ま
での遺構や遺物が出土しました。前期の水
田は、農道や用排水路を備え、ゆるく傾斜
する低湿地に、10~200平方メートルの小区画の
水田で、水を均一に満たすための工夫だと
考えられます。周溝墓には大きさや埋葬方
法に差がみられ、身分や階層差があらわれ
ています。



服部遺跡の水田跡(『ムラの変貌』より)

iii 米原にやってきた米作り

滋賀県内でいち早く米作りが始まった弥生時代前期の遺跡の分布を地理的にみると三つのグループに分けることができます。ひとつは津市北部の比叡山地の狭い扇状地に立地する湖西南部グループで、錦織遺跡・滋賀里遺跡・穴太遺跡(津市)などがあります。つぎに、野洲川や日野川水系の扇状地や三角州に立地する野洲平野グループで、服部遺跡のほか赤野井遺跡(守山市)・霊仙寺遺跡(栗東市)などがあります。そして、北近江の姉川・天野川・矢倉川がつくる沖積平野に立地する湖北平野グループで、立花遺跡・入江内湖西の野遺跡(米原市)、川崎遺跡・十里町遺跡・宮司遺跡・大辰巳遺跡・大安寺遺跡・妙光庵遺跡(長浜市)、矢倉川遺跡(彦根市)などです。野洲平野の中心は服部遺跡で、大阪湾に上陸した弥生文化がダイレクトにもたらされたと考えられます。北近江では、規模や遺物の豊富さから川崎遺跡が中心的な役割を果たし、従来は、伊勢湾地方に上陸した弥生文化が迂回して流入したととらえられてきましたが、やはり、大阪湾に上陸した弥生集団の一部が、適地をもとめて米原や長浜にやってきたようです。



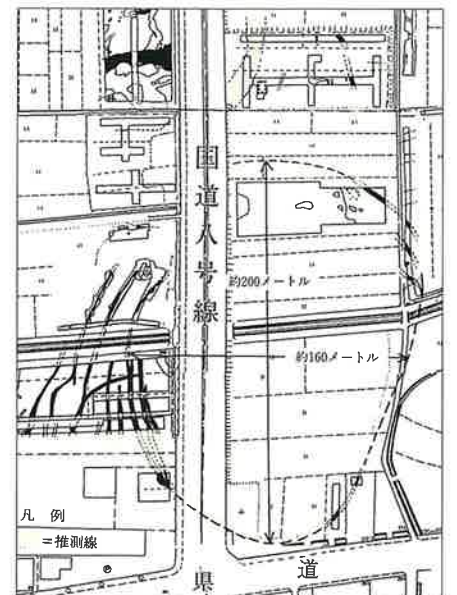
滋賀県内の弥生時代前期の遺跡(『長浜市史』より)



川崎遺跡弥生時代前期の土器
(『ムラの変貌』より)

◇コラム 川崎遺跡(長浜市)

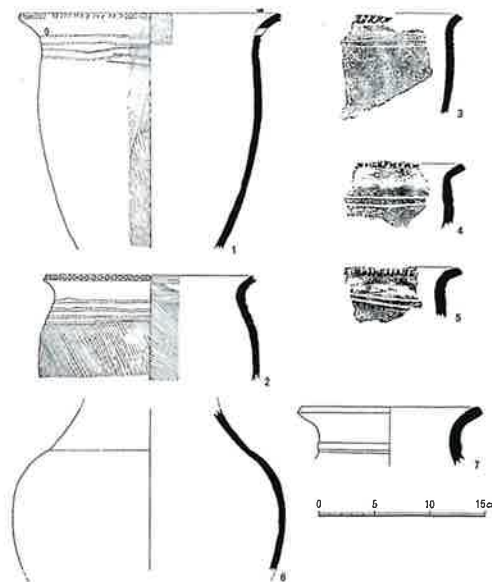
発掘調査で弥生時代前期に始まる濠に囲まれた環濠集落であることがわかりました。環濠のなかからは、大量の弥生土器や木製農具、石包丁など、弥生人が使っていた生活道具のほか炭化したお米がみつかりました。環濠の内側は居住区と考えられますが、これまでのところ、住居跡などの明確な遺構は確認されていません。また、環濠内から敵の侵入を防ぐ逆茂木が検出されないことや、断面がV字型にならず緩やかなU字型であることなど、防御用もさることながら、水田の用水路の役目も大きかったと考えられています。土器には弥生時代初期のものがあり、この遺跡が北近江最古の弥生集落だとわかりました。さらに、縄文時代中期から晩期の土器も出土していることから、この地域が早くから開発されていることがわかりました。縄文晩期の土器は伊勢湾地方のもので、東海地方との交流がうかがわれます。



川崎遺跡環濠(『長浜市史』より)

■立花遺跡(上多良・中多良)

昭和62年に、県営ほ場整備事業にともない発掘調査がおこなわれ、前期から中期にかけての遺跡であることがわかりました。前期の遺構は検出できませんでしたが、良好な遺物包含層から前期中段階の土器が出土しました。土器には、頸の部分に削り出し突帯をもつ壺(6)や、口縁端部に刻み目を施し、胴部の上方に沈線文を描く甕(1)、木葉文が施された蓋など、北近江の弥生時代前期の良好な資料が得られました。中期では、円形の大型土坑や自然流路などが検出されましたが、その性格は明らかではありません。土器には、東海地方からの搬入品などが多量に出土しています。川崎遺跡でも前期新段階の東海地方の水神平式土器が出土しており、東海地方からの強い影響がみられます。



立花遺跡出土土器実測図



前期中段階の土器(右上図6)



甕(前期/右上図1)



木葉文土器(前期)



明治時代の入江内湖と松原内湖

■入江内湖西野遺跡(磯)

昭和25年の干拓まで米原駅の琵琶湖側に広がっていた入江内湖周辺の遺跡のなかで、数次にわたる調査により比較的性格が判明している遺跡です。昭和24年に京都学芸大学(当時)の小江慶雄が調査し、弥生時代後期および古墳時代前期の遺物包含層を確認しています。昭和51年の調査では、包含層から前期(中・新段階)から中期の土器が出土し、弥生時代の銅製鍬(やじり)も出土しました。立花遺跡や入江内湖西野遺跡は、内湖に隣接する湿田型土壌に水田が営まれたようです。とくに西野遺跡は山際に立地しており、安定して営まれた集落だったようです。



干拓前の入江内湖(戦前/左奥が西野遺跡)

iv 縄文から弥生へ

立花遺跡の西方200^{ちくまつくだ}付近くに筑摩佃遺跡があります。縄文時代晩期に縄文人によって営まれた集落で、ここの縄文人が稲作技術を受け入れ、居住地を少し東の立花遺跡に移して、周辺に水田を営んだと想定されます。入江内湖西野遺跡でも、縄文晩期の土器が弥生土器とともに出土しています。弥生人は、それまでの縄文人とはかかわりが少なかった低湿地を水田化して、各地で稲作を営み始めました。北近江に弥生稲作文化が受け入れられる土台として、低地における縄文晩期の縄文人の生活があったことが重要です。滋賀県内の弥生前期の遺跡からは、縄文晩期の土器が出土しています。水田稲作を営む新しく参入した弥生系集団と、まだ農耕をおこなわない縄文系集団が、異なる生業形態をたもちながら、緊密な関係で共生していたと考えられています。一定の共生期間を経験した縄文系の人々が、水稲農耕技術を習得して、一体となり北近江に本格的な農耕集団が形成されたようです。

■ 杉沢遺跡(杉澤)

昭和13年(1938)に、北近江ではじめての発掘調査がおこなわれ、2組の縄文時代晩期後半の「合せ口甕棺(土器棺)」^{あわ くちかめかん}が見つかりました。昭和29年(1954)には、京都学芸大学(当時)による調査がおこなわれ、合せ口甕棺1組が出土しました。以降、これまでに13基の甕棺墓が出土しています。採集された遺物や調査から、縄文中期末ごろに集落が営まれ始め、晩期前半から終末まで、地点を移動しながら長期間継続していることがわかっています。このころすでに北部九州から西日本にかけて米作りが始まっていました。杉沢遺跡では弥生時代に集落が営まれた形跡はなく、水田を作るのに適した琵琶湖に近い低地に移動したと考えられます。



河童型土偶(縄文時代/筑摩佃遺跡)



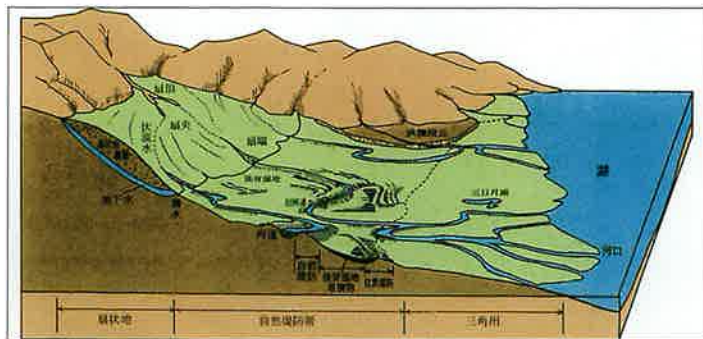
杉沢遺跡甕棺出土状況(令和2年1月)



農耕具(古墳時代前期/入江内湖遺跡)

v 初めのころの米作り

前期の集落・立花遺跡は、天野川の南側に広がる低地に位置しています。この付近から入江内湖の北側一帯には、湿田型土壌が広く分布しています。入江内湖西野遺跡も湿田型土壌を対象に立地しています。天野川の北で営まれた五反田遺跡(宇賀野)^{ごたんだ}や法勝寺遺跡(高溝)^{うかの ほうしょうじ}などの前期の集落も湿田型土壌に水田が営まれています。長浜平野の多くの遺跡も同様です。このように、前期の集落が湿田型土壌に立地した要因として、この時期の遺跡から鉄製の農具がほとんど出土していないことと関連がありそうです。すでに鉄器は朝鮮半



沖積平野の模型図(『ムラの変貌』より)

島からもたらされていましたが、量もわずかで、斧や刀子(ナイフ)など道具を製作する利器として使用されました。スキやクワは木製のものを使うしかなく、軟質の湿田型土壌が選択されました。また、灌漑用水を引くような大規模工事もできません。耕作はしやすいけれど高い生産量を望めないという矛盾を抱えながら初期の米作りが始まったのです。

II. 米原の弥生遺跡

i 前期の遺跡

天野川の南側では、立花遺跡と入江内湖西野遺跡に少し遅れて、前期新段階の土器が採集された矢倉川河口付近の矢倉川遺跡・松原内湖遺跡（彦根市）の集落が営まれました。天野川の北でも五反田遺跡、法勝寺遺跡、塚塚遺跡（箕浦・顔戸）で前期新段階の土器が採集されていることから、天野川の下流の沖積低地一帯で前期の終わりには米作りをおこなう集落が出現したことがわかります。五反田遺跡は天野川北側で営まれた最も古い集落です。東西約450m、南北約550mの馬蹄形に広がる集落跡で、溝状遺構やピット群がみつきり、前期新段階から中期末の土器が出土しています。高溝集落の北に広がる狐塚・法勝寺遺跡は、縄文時代から鎌倉時代にいたる複合遺跡で、この地域の古代史を究明するうえで重要な遺跡です。



埋塚遺跡



狐塚遺跡



黒田遺跡



奥松戸遺跡

ii 中期の遺跡

前期に営まれた各集落は、つづく中期にも継続して営まれたことが出土した土器からわかります。このうち、立花遺跡からは、かなりの量の中期の土器が出土していて、この地域の中心となる拠点集落として発展したと考えられます。入江内湖西野遺跡も、近接して磯山と佐和山の低い丘陵がのびており、恵まれた自然環境のもとで、安定した集落が営まれたようで、後期から古墳時代前期の土器も大量に出土しています。埋塚遺跡や法勝寺遺跡も含めて、継続して営まれた集落とは別に、中期から新たに出現したのが墓町遺跡（宇賀野）、黒田遺跡（顔戸・箕浦）、長沢遺跡（長沢）です。墓町遺跡からは、中期の土器と磨製石剣が出土しています。その北の長沢遺跡では、中期前半から後期中葉までの土器のほか、勾玉、蛤刃石斧、扁平片刃石斧、磨製石剣などのほか、各種木製品が出土しています。そして、中期中葉には、法勝寺遺跡、奥松戸遺跡（長沢）、西門寺遺跡（西門寺）などで方形周溝墓群が検出されていて、方形周溝墓に埋葬された家長たちが居住した集落だったと推定されています。

iii 後期の遺跡

狐塚・法勝寺遺跡全域から、中期末から後期の壺や高坏などの土器が出土しています。石器も木材を加工する抉入柱状片刃石斧や扁平片刃石斧など、弥生時代特有の石器が出土しています。遺構としては溝跡や土坑のほか、方形周溝墓群がいくつか確認されています。長沢の東方にある奥松戸遺跡からも、後期の方形周溝墓群と、竪穴住居群、溝跡などが検出されました。米原の弥生遺跡は、天野川南側では入江内湖の周辺、北側では、横山丘陵が天野川にいたる日撫山西方に広がる平地に集中しています。米作りを始めるうえで適当な土地であったことがわかります。



天野川下流域



丹生川流域

iv 天野川中流域の遺跡

天野川下流の沖積低地で弥生遺跡が集中するのは、国道8号バイパス敷設やほ場整備工事に伴う発掘調査が多くおこなわれた結果でもあります。横山丘陵^{りょうぜんさんち}と霊仙山地^{りょうせんさんち}に挟まれた天野川中流域でも弥生遺跡の存在が想定され、能登瀬や寺倉などで、扁平片刃石斧や蛤刃石斧などが採集されています。^{きめ}井には地蔵堂前遺跡^{じぞうどうまえ}がありますが詳細は不明です。天野川と合流する丹生川流域にも弥生遺跡があり、江竜遺跡^{えりゅう}(下丹生)から石斧、上丹生A遺跡(上丹生)でも弥生時代の遺物が採集されていますが、これらが立地する平地は灰色低地土壌の半湿田型土壌で、弥生時代に大規模開発が進展したとは思えません。

v 山間部の状況

米原市内の弥生遺跡は、『滋賀県遺跡地図』によると、天野川河口と下流域に位置する米原地域(旧米原町)で20か所、近江地域(旧近江町)で16か所を数えます。これに対し、天野川の上中流部にあり、標高300[㍎]程度の山地が独立丘のように点在する山東盆地^{さんとうぼんち}に位置する山東地域(旧山東町)では柏原地域にわずかに4か所。伊吹山麓と姉川の上流に展開する伊吹地域(旧伊吹町)で7か所と対照的な分布を示し、わずかな弥生土器や蛤刃磨製石斧が採集されているだけです。縄文時代、山麓地域の拠点集落だった杉沢遺跡でも、米作りを生活と生業の中心に据えた新しい文化を受容しようとした人たちは、主体的に離村、分散し、多くが米作りに適した河川に近い低地に進出し、山麓の縄文遺跡は解体していったと考えられます。

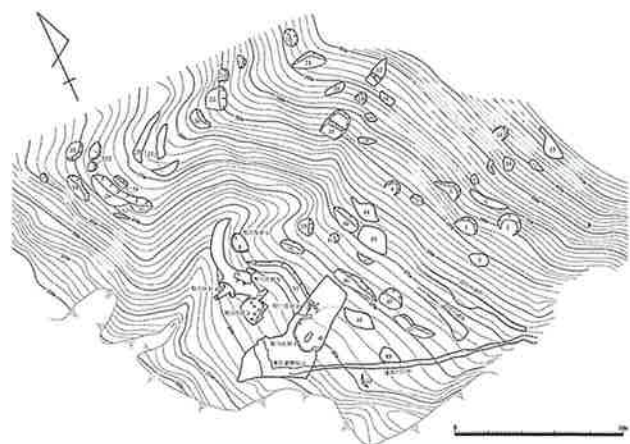


柏原採集蛤刃石斧

村木採集蛤刃石斧

■百済寺南川遺跡(東近江市)

山間部の弥生時代を考えるとときに参考となる遺跡があります。湖東三山のひとつ^{ひやくさいじ}百済寺は、鈴鹿山麓に展開し中世に栄えた^{やまでら}山寺ですが、この背後の標高約360[㍎]以上の高所の谷間で、後期から古墳時代初頭頃にかけての集落跡が発掘調査で確認されました。現在のわれわれからすると、住むにはけっして好条件とはいえない場所です。6棟の竪穴住居と溝状遺構が検出されましたが、さらに、周辺には50か所の小平坦地^{しょうへいたんち}が確認され、20軒以上の集落^{こうちせいしゅうらく}だったようです。このころ、「高地性集落」が各地で営まれますが、それらは良好な眺望が得られる位置にあります。この遺跡はなぜ眺望があまり効かない山中の谷奥に営まれたのでしょうか。その目的として、林業や狩猟、鉱物など山の資源採取があげられます。また、峠を利用した交通路の物資運搬の中継基地的なことも考えられます。平地で米作りをする弥生時代のイメージとは異なるくらしが、山中で展開していたようです。



百済寺南川遺跡遺構図(『百済寺遺跡』より)

vi 長浜平野の様相

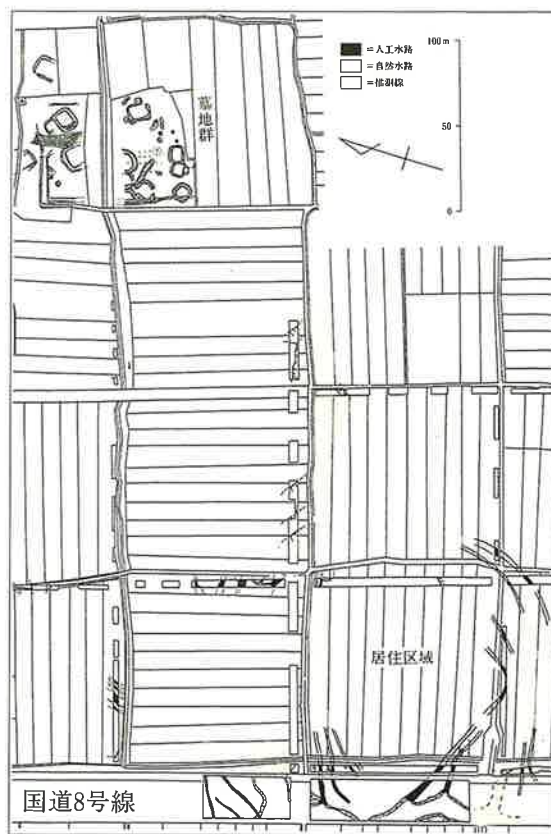
調査例の多い長浜平野(旧長浜市)の弥生集落の移り変わりを紹介します。もっとも古く成立した川崎遺跡は前期新段階のうちにほぼ消滅します。これは、初期の水田が生産性に乏しいうえに、河川近くで洪水や水不足の影響を受けやすいことから、新たな技術(道具)の開発に伴い、川崎集落の人々が自然条件に恵まれた上流に場所を選んで分村した結果だと考えられます。前期新段階に営まれた集落では、大辰巳遺跡と塚町遺跡のみが中期以降も営み続けます。さらに、中期になって新たな集落が営まれます。鴨田遺跡、大戊亥遺跡、高橋遺跡、越前塚遺跡、大塚遺跡などです。これらの遺跡は、何本かの河川(姉川旧流路)沿いに展開し、扇状地扇端から扇中央付近まで、より標高の高い所を目指して分布しますが、鴨田遺跡は前期に成立した大辰巳遺跡の下流に接します。米作りにとって水の確保は生命線で、下流に新たな集落を営むことは不利ですが、両集落とも古墳時代前期まで続いていることから、大辰巳集落を母村として、下流に展開する鴨田、大戊亥、高橋の各集落はその分村だと考えられています。これらの集落は古墳時代前期まで営みを続けます。さらに弥生時代後期には新たな集落が成立します。



長浜市内の弥生中期の遺跡分布図(『長浜市史』より)

vii 弥生時代の地域交流

米原でも早い時期に米作りがおこなわれた前期新段階から中期前葉の長沢遺跡などの土器は、甕の口の部分(口縁)が「く」字状になるものなどの畿内の土器と、受け口状になる近江特有のもの(近江型甕)があります。中期末以降に成立した奥松戸・法勝寺・狐塚・高溝・顔戸各遺跡では、この近江型甕とともに周辺各地から持ち込まれた土器が出土しています。高溝遺跡大井地区では、パレススタイル(宮廷式)土器という東海系土器が多数出土しました。平行線文や波状文をくり返し施し、大きく張り出した下部が赤く彩色されている後期に広がった土器です。このほか、北陸地方の月影式土器(金沢市)や、山陰地方の青木IV式(米子市)の大形壺や鼓形器台などがみられます。このような様相は長浜市の大辰巳遺跡も同様で、北近江が弥生時代後期に畿内・東海・北陸の接触、交流地域という文化様相を示しています。



鴨田遺跡の遺構(『長浜市史』より)



近江系受け口状口縁土器
(立花遺跡)



パレススタイル土器(高溝遺跡)



北陸系土器(高溝遺跡)



山陰系土器(高溝遺跡)

III. 弥生人の暮らし — 生業の復元 —

i 農 耕

弥生人は、縄文人とはかかわりが少なかった低湿地を利用し米作りを営みました。稲作をおこなうには田んぼを耕すクワ、スキ。土をならすエブリ。収穫後には^{たてぎね}堅杵や臼などの木製農具が使用されました。長浜市の川崎遺跡では、^{ひろくわ}広鋤や2個の広鋤の製作中の未製品などが出土しています。塚町遺跡では全長10^{センチ}におよぶ長大な土坑から、前期末から中期初頭の土器とともに未製品や丸太材が出土していて、一時的に水漬けた^{ちよぼくしせつ}貯木施設とみなされています。木製農具には、周辺の山林で伐採した強靱なカシ材が使用されています。米原では弥生時代の木製農具の出土例は少ないのですが、入江内湖遺跡では、古墳時代前期後半の保存状態の良い農耕具などの木製品が大量に出土しています。石器類では、入江内湖遺跡から稲の穂首を刈る石包丁や、農耕具を作る蛤刃石斧、扁平片刃石斧、挿入柱状石斧などが出土しています。弥生時代の^{どうたく}銅鐸には、脱穀をしている人物が三角頭の女性に表現されています。弥生社会で男女の性別分業がおこなわれていたことを示します。さて、農作物の栽培は米だけでなく、アワ、キビ、オオムギ、ゴボウ、マクワウリ、ヒョウタンなどが栽培されていました。また、縄文時代の主要な食糧であったドングリ類も採集されていました。



川崎遺跡 広鋤未成品、広鋤
(『ムラの変貌』より)



入江内湖遺跡鹿角製鋤

ii 狩 猟

縄文時代以来の狩猟もおこなわれており、弥生遺跡からは弓矢の^{せきぞく}石鏃が意外と多くみつかっています。立花遺跡では11点の石鏃が出土しています。石材は奈良県二上山^{にじょうざん}などで採れるサヌカイト製が大部分を占め、^{ねんぱんがんせい}粘板岩製のものや細身で長い形態の岐阜県下呂石製のものがあります。弥生人の狩猟のようすは、銅鐸の絵にイノシシを弓で射る男子が描かれたものがあります。シカとイノシシは弥生集落周辺に棲む動物で、貴重な動物性タンパク質を得ることができました。入江内湖遺跡行司町地区の調査では、弥生時代末から古墳時代初頭の弓が3本出土していて、全体に漆が塗られたものもあります。



入江内湖遺跡木白

入江内湖遺跡木製弓
実測図(古墳時代前期)

iii 漁 撈

琵琶湖岸や入江内湖周辺にある米原の弥生集落では、米作りのかたわらで漁撈活動がさかんにおこなわれていました。入江内湖遺跡では弥生時代末から古墳時代初頭の層から、魚の捕獲に使われたたも網の^{わく}杵や、^{えんれき}扁平な円礫の両端を打ち欠いて網の重りにした^{せきすい}石錘が出土し、^{あみりょう}網漁がおこなわれていたことがわかりました。また、琵琶湖や内湖では、縄文時代からすでに丸木舟が利用されていましたが、入江内湖遺跡では、舟をこぐ^{かい}櫂や、船底にたまる水をかき出すアカ取りが出土しています。漁撈関連の遺構としては、黒田遺跡の旧河道で築とみられる杭列がみつかっています。



たも(古墳時代前期
/入江内湖遺跡)



アカ取り(同左)



木製高坏(古墳時代前期/入江内湖遺跡)

iv 工芸

入江内湖遺跡行司町地区の発掘調査では、弥生時代末から古墳時代前期の大量の木製品が出土しました。木製高坏もそのひとつです。ケヤキを横木取りし、鉄斧などの工具で坏のだいたいの形を削り出したあと、ロクロでひいて素地を作りだしています。坏部と脚部は別々に製作され、その接合部分の中心に穴を彫り、ほぼ均等に五分割された溝が刻まれています。物を供える坏の内面部分には赤漆の痕跡があり、外面および脚部は黒漆で仕上げられていたようです。口縁の直径約42㍍の大型品で、類例が少なく、ロクロ技術に驚かされます。

v 玉造り

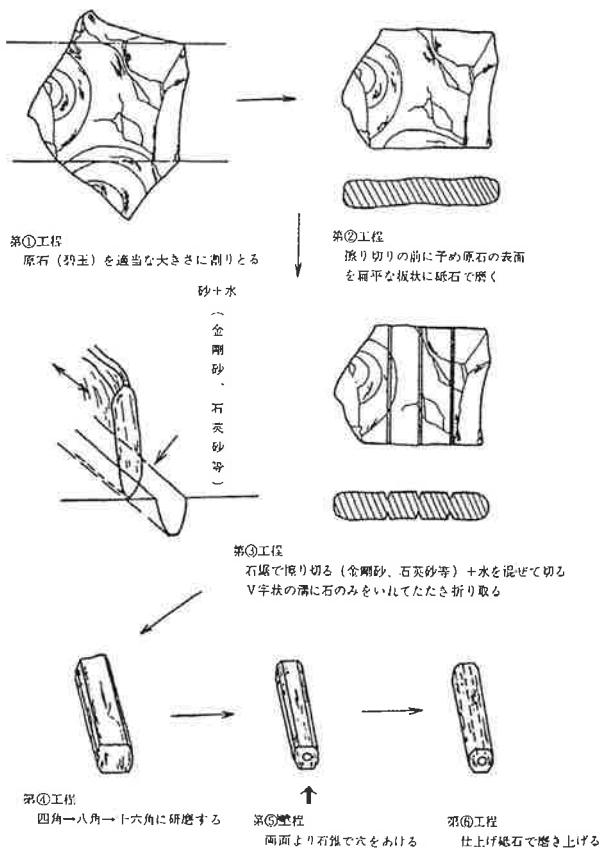
米作りの始まりと同時に、弥生人が身につける装身具にも、それまでなかった新たな玉類が登場します。そのひとつが碧玉製の管玉です。北部九州の縄文時代晩期の遺跡で出土していて、米作りとともに朝鮮半島から伝わりました。管玉造りは前期には山陰に伝わり、中期に近畿、東海、北陸へ、中期後半から後期前半にかけて新潟佐渡で大規模な生産がおこなわれました。玉造りの遺跡は、原石が採れる山陰から北陸、佐渡の日本海沿岸に広く分布しますが、産出しない近畿でもみつかっています。

立花遺跡では、中期の玉造りに関連する遺物がみつかっています。管玉の製品、穴のある途中の未成品、切断するための溝が入った未成品、原石、割ったときの破片のほか、原石を切る石鋸、砂岩製の玉砥石、石材加工用具の扁平片刃石斧などです。これらがひとつの土坑からまとまって出土しました。管玉は、淡い緑色の石材で長さ6㍍、径2㍍の極細のものや、緑色で長さ2㍍、径7㍍のものなどがあります。砂岩系の砥石には、仕上げ磨きをおこなったときの細い一条の溝があります。また、1点メノウの剥片もありました。質量は多くありませんが、管玉製作の各工程に関するものと、製作工具の一部がそろっています。長浜市の横山遺跡では玉造り工房がみつかっています。竪穴状遺構のなかの土坑から、石を擦り切るための金剛砂や石英砂がみつかっています。

滋賀県で管玉造りに使用される原石は碧玉が中心ですが県内では産出しません。越前産や佐渡産のものを入手したとみられます。また、立花遺跡の原石を擦切るために使われた石鋸は、紅簾片岩製で和歌山県で産出します。玉造り遺跡は、原石の入手や製品の交易に適した琵琶湖岸や川岸に立地しています。



玉造り関係資料(立花遺跡)

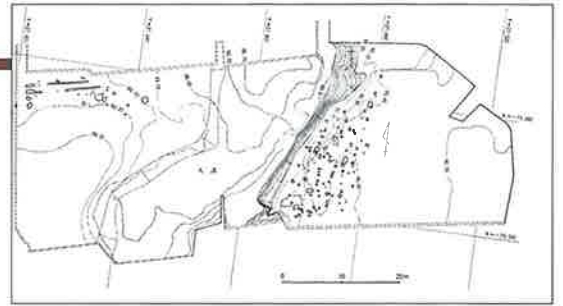


玉造りの工程

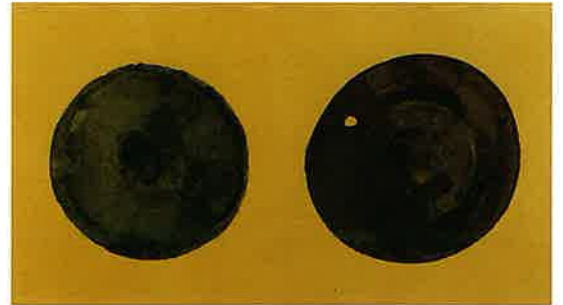
IV. 弥生人のまつり

i 水辺のまつり

高溝遺跡大井地区の発掘調査では、幅10~18cmの大溝状の落ち込みがあり、浅瀬と思われるところに3層にわたって土器の集積が検出されました。周辺に石を並べるなど、意図的に投入したもので、遺構底部からは、丹塗りの土器、有孔ミニチュア土器、モモの種、弓や太刀の形の木製形代、銅鏃、「小型儀鏡」とよばれる小ぶりの銅鏡などが出土しています。長浜市の鴨田遺跡でも、穴が2か所あけられた小型銅鏡が、特殊な手焙り式土器などと出土していて、農耕儀礼にともなう水辺のまつりが想定されています。



高溝遺跡大井地区の大溝



高溝遺跡大井地区出土の小型銅鏡

ii まつりの道具

高溝遺跡の小型銅鏡は2枚あり、1枚は重圏文鏡とよばれる直径2.4~3.8cm、厚さ2mmを測り、穴があけられていることから吊り下げられていたようです。2枚目の素文鏡も同程度の大きさです。水とかかわる儀礼とかかわるものとして、木偶(でく)と舟形木製品があります。長沢遺跡からは、頭に冠状のものをのせ目と鼻を作りだした、木製顔面彫像が出土しています。同様の木製彫像は、入江内湖遺跡、大中の湖南遺跡、烏丸崎遺跡、湯ノ部遺跡など旧河道や湖岸など水辺の遺跡で出土しています。舟形木製品は漁撈や舟運の安全に関するまつりの道具と考えられ、弥生時代のものが県内でもみつっていますが、入江内湖遺跡行司町地区からは古墳時代初頭のものが10点出土しています。

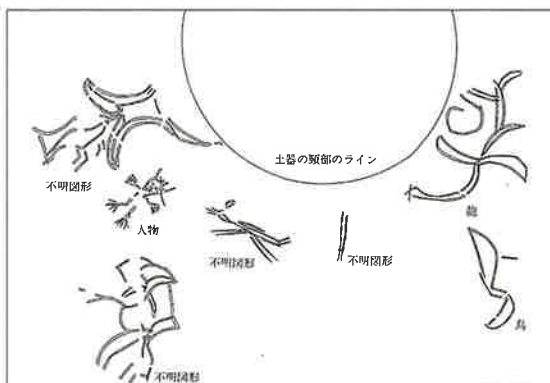


舟形木製品(古墳時代初頭/入江内湖遺跡)

入江内湖遺跡で採集された3点の鹿角製の戈(短剣)も注目される遺物です。東南アジアでは祖霊をわが身につなぎとめるために用いられる類例があり、首長が佩刀していたと考えられます。



鹿角製戈(弥生時代/入江内湖遺跡)



鴨田遺跡の絵画土器(『長浜市史』より)

iii 弥生人の絵

弥生人のいのりの表現のひとつとして絵画文(線刻画)があります。銅鐸の狩猟や収穫の絵がよく知られていますが、土器に描かれたものもあり、中期頃からさかんになります。狐塚遺跡から中期末から中多良遺跡では、手焙り土器の頸の部分の破片(古墳時代前期)に、人物が空に向かって手を広げる絵が描かれています。弥生時代の絵画土器には鳥が多く描かれ、渡り鳥が運んできた穀物の霊が種もみを活性化させ、収穫につながるという信仰に基づいています。鴨田遺跡の方形周溝墓に供えられた壺には、鳥の仮装をした人物のほか、鳥や水神の象徴である龍が描かれています。

V. 首長の出現 —周溝墓から古墳へ—

i 共同体の成熟と統率者

米作りが始まった前期から中期前半の集落では、それぞれが開発した水田は、空間的な広がりはごく限られたものですが、それでも家族単位でまかなえるような作業量ではなく、血縁者とともに、地縁(近くに住むもの)による集団をつくって定住し、米作りを中心にした共同体が成立しました。そして、共同して水田経営にあたるために、経験豊かな統率力のあるリーダーがもとめられました。ときには、隣の集落との土地や水争いに備えた武力にたけた人物でした。長浜市の川崎遺跡や鴨田遺跡のような環濠集落は、このような事態に備えたものです。

ii 方形周溝墓の築造

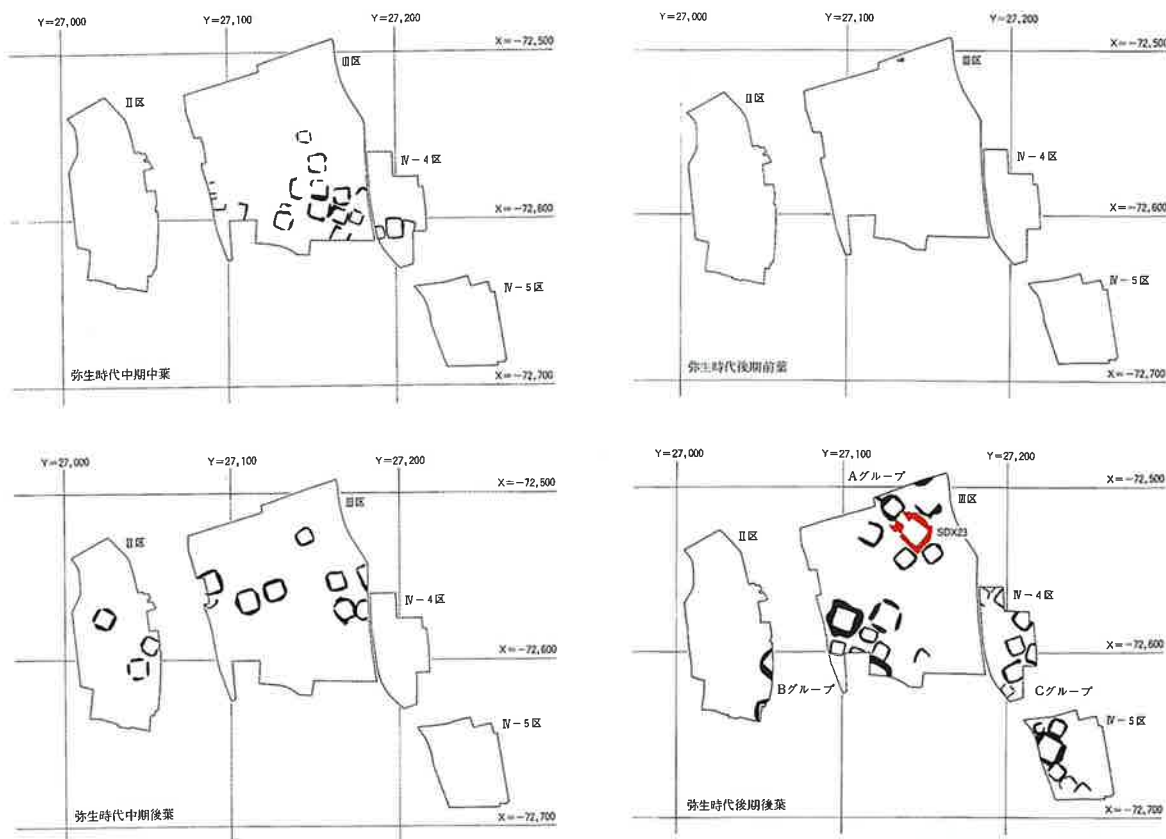
米原の弥生集落では、中期中葉以降に集落内部で新たな変化がみられるようになります。集落に付随して方形周溝墓というこれまでみられなかった墓が築かれます。方形周溝墓は、近畿を中心に古墳出現直前まで築かれ続けたもので、死体を埋葬した方形の低い墳丘の外側に一辺10~20[㍍]の溝をめぐらせ、外部との境界を区画しました。埋葬された人物を意識させるように墓の存在を明確にし、築造に多少の人手を要し、各種土器を供えて葬送儀礼をおこなうなど、統率者の墓と考えられます。天野川の南側では、大乾遺跡(上多良)周辺で25基みついています。天野川北岸では、後期を中心約3[㍍]ごとに5つの周溝墓群が南北に並んで展開しています。奥松戸・法勝寺・長門寺・埋塚・西円寺の各遺跡です。なかでも、法勝寺遺跡では中期中葉に18基、いずれも一辺10[㍍]前後のもの。中期後葉には12基検出され、しかも10[㍍]前後と、15[㍍]前後という格差があらわれます。後期前葉は空白ですが、後期後葉には、3つのグループに分かれ、ひとつには全長20.4[㍍]の前方後方形周溝墓を中心に7基みついています。



方形周溝墓(長門寺遺跡/令和元年)



周溝内出土の供献土器(高溝遺跡)



法勝寺遺跡の方形周溝墓変遷図

iii 前方後方形周溝墓の出現

法勝寺遺跡の周溝墓の変遷をたどると、格差のない小型周溝墓を作る段階。格差はないがやや大型になり、造墓数が減少する段階。そして、前方後方形周溝墓を核としたグループが生じる段階の三段階の時間的変化がおえ、前方後方形周溝墓が特定の人物の墓として出現する経緯を知ることができます。おそらく葬られた人は、横山丘陵南端の西側に広がる地域の集落(農耕共同体)を統率する首長だと考えられます。さらに、県内の前方後方形周溝墓の在り方をみると、法勝寺遺跡のように集団墓の核となる場合と、集団墓から独立する場合があります。後者は独立して葬られる古墳出現への経緯を示します。



前方後方形周溝墓(法勝寺遺跡)

iv 円形低墳丘墓の出現

天野川北側で中期中葉から盛行した方形周溝墓は、後期末には終焉を迎えます。続く墳墓群は、天野川をはさんだ対岸の西円寺遺跡に移ります。西円寺遺跡は、弥生時代後期から古墳時代中期にいたる環濠集落で、集落の北側環濠内に3世紀末葉の円形低墳丘墓(第1号墓)から5世紀末葉の円形低墳丘墓(第3号墓)にいたる、古墳のような独立した首長墓が築かれています。このような円形墳墓の採用は、古墳時代への過渡期の墳墓の形態を知るうえで重要です。第2号墓は、4世紀初頭の土器を供献する方形周溝墓です。



帆立貝形周溝墓(鴨田遺跡)

円形低墳丘墓から円墳へ
(『墓と弥生時代』より)

v 息長古墳群の成立

天野川北側に立地する横山丘陵の南部には、山つたるじんじゃこふん(山つたるじんじゃこふん)津照神社古墳を中心として22基で構成される「息長古墳群」が知られています。丘陵南端に位置する日撫山古墳は、長辺15^m、短辺13^m、比高差1.5^mの長方形墳で、息長古墳群最古の前期古墳とされます。この東方にある定納古墳群は、9基で構成された古墳群(2基消滅)で、4世紀に築造されはじめました。これらの古墳は、天野川対岸の西円寺第2号墓や第3号墓と時期を重ねています。丘陵尾根部の前期古墳と、環濠集落内の低墳丘墓が



円形低墳丘墓(第1号墓/西円寺遺跡)



定納古墳群

対をなしています。これは、新たな墳墓(前期古墳)の出現であり、地域の首長と集落共同体の首長の墳墓の差をあらわしているとも考えられています。



円形低墳丘墓(第3号墓/西円寺遺跡)

VI. 東アジアのなかの北近江

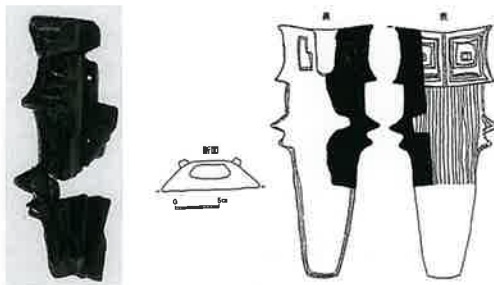
古代日本と、中国や朝鮮半島との直接的な「交流」が考古資料にあらわれるのは、弥生時代の中頃からです。「楽浪海中倭人あり」という『漢書』地理志の一節は有名です。紀元前1世紀頃のことで、畿内を中心に社会が発展・成熟し、農業生産物の蓄積やそれをめぐる争いなどを通じて社会の階層化や集団規模の拡大が生じ、中国の史書で「国」とよばれる単位が誕生し、権力者が生まれ、他地域に影響をおよぼします。唐古・鍵遺跡(奈良県田原本町)や池上曾根遺跡(大阪府和泉市・泉大津市)などの弥生時代の巨大集落が誕生します。

紀元前1世紀後半、北部九州を中心に中国(漢)製の器物が多数出土します。韓国南東部沿岸の金海地方はその交易の中心で、北部九州のものを中心に弥生土器が多数出土していますが、近年そのなかに近江系土器があることが確認されました。

米作りも安定し、集落の規模も大きくなったこのころ、長浜市鴨田遺跡から紀元前(前漢元狩5年(紀元前118年))に中国で鑄造されはじめた貨幣「五銖錢」が出土しました。さらに、川崎遺跡から出土した弥生時代前期の銅製短剣のものと考えられる木製朱塗りの「飾り鞘」は、鞘あて部に彫られた雷文に古代中国の影響がみられるようです。これらが北近江の弥生遺跡でみつかったということは、北近江が大陸との交流拠点として重要な場所であったことを物語ります。



五銖錢(鴨田遺跡/『湖北の王たち』より)



木製飾り鞘(川崎遺跡/『湖北の王たち』より)

《参考文献》

- 秋山浩三『弥生実年代と都市論のゆくえ 池上曾根遺跡』2006新泉社
 浅井良英「近江における方形周溝墓の研究」2017滋賀県立大学博士論文
 近江町『近江町史』1989
 坂田郡社会教育研究会「文化財ニュース 佐加太」各号
 滋賀県教育委員会『平成28年度滋賀県遺跡地図』2017
 滋賀県教育委員会『滋賀県文化財学習シート遺跡編上・下』2005
 滋賀県教育委員会他『百濟寺遺跡』2007
 滋賀県立安土城考古博物館『墓と弥生時代』1997
 滋賀県立安土城考古博物館『ムラの変貌 稲作と弥生文化』1999
 長浜市『長浜市史 第1巻 湖北の古代』1996
 長浜市立長浜城歴史博物館『湖北の王たち』2003
 米原町『米原町史 資料編』1999
 米原町『米原町史 通史編』2002
 松室孝樹「姉川左岸地域における遺跡の動態
 ー弥生時代後期から古墳時代にかけてー」
 『滋賀考古 第19号』1998
 宮崎幹也「天野川流域における首長墓の動向」
 『滋賀考古 第6号』1991
 森下章司『古墳の古代史 東アジアのなかの日本』2016ちくま新書

※発掘調査報告書は割愛しました

《協力機関・協力者》

長浜市歴史遺産課・古山明日香・宮崎幹也

《米原市埋蔵文化財公開活用事業

パンフレット一覧》

- 『息長氏の遺宝』(平成19年度/14頁)
 『湊・舟、そして湖底に沈んだ村』(平成20年度/18頁)
 『天野川流域の古代寺院 壬申の乱から聖武行幸へ』
 (平成21年度/18頁)
 『京極家激闘譜 ー京極氏の遺跡、信仰、文化ー』
 (平成22年度/18頁)
 『東西文化の交差点(スクラブル)・まいばら』
 (平成23年度/18頁)
 『北近江考古学事始め
 ー地域史を語り続ける埋蔵文化財ー』
 (平成24年度/22頁)
 『伊吹山と播隆』(平成25年度/10頁)
 『伊吹山と円空』(平成25年度/10頁)
 『伊吹山 ー荒ぶる神の坐す山の歴史ー』
 (平成26年度/26頁)
 『学校のまわりの宝物』(平成26年度/30頁)
 『石塔造立 ーまいばら石造物100ー』
 (平成27年度/34頁)
 『霊仙山 ー「江陽四高山ノ其ノツツナリ」ー』
 (平成28年度/26頁)
 『米原の城 ー城のまちの戦国時代ー』
 (平成29年度/30頁)
 『米原の縄文 ー縄文人の楽園・まいばらー』
 (平成30年度/30頁)
 『米原の弥生 ー米作りが始まったころー』
 (令和元年度/16頁)

※伊吹山文化資料館で複写対応しています(有料)

米原市の弥生遺跡位置図

米原市の弥生遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	番号	遺跡名	所在地
1	須川遺跡	須川	25	地蔵堂前遺跡	醒井
2	御墓遺跡	大野木	26	江竜遺跡	下丹生
3	深谷遺跡	大野木	27	朝倉B遺跡	下丹生
4	五反田遺跡	大野木	28	朝倉A遺跡	下丹生
5	小泉遺跡	小泉	29	上丹生B遺跡	上丹生
6	堂ノ前遺跡	弥高	30	上丹生A遺跡	上丹生
7	高番遺跡	高番	31	八坂神社遺跡	三吉
8	杉沢遺跡	杉沢	32	法勝寺遺跡	高溝
9	井の田遺跡	大清水	33	狐塚遺跡	高溝
10	岩の上遺跡	伊吹	34	高溝遺跡	高溝・顔戸
11	長谷遺跡	下板並	35	一本木遺跡	顔戸
12	米原駅西遺跡	梅ヶ原	36	亀塚遺跡	顔戸
13	中多良遺跡	中多良	37	顔戸遺跡	顔戸
14	立花遺跡	上多良・中多良	38	長門寺遺跡	顔戸
15	大乾古墳群	上多良	39	長沢遺跡	長沢
16	筑摩佃遺跡	朝妻筑摩	40	土川湖底遺跡	長沢・宇賀野・高溝
17	宮田遺跡	磯	41	五反田遺跡	宇賀野
18	袖塚遺跡	磯	42	宇賀野墓町遺跡	宇賀野
19	矢倉川遺跡	磯	43	黒田遺跡	顔戸・箕浦
20	物生山遺跡	磯	44	世継遺跡	世継
21	磯湖岸遺跡	磯	45	岩井遺跡	能登瀬
22	磯山遺跡	磯	46	埋塚遺跡	箕浦・顔戸
23	入江内湖西野遺跡	磯	47	西門寺遺跡	西門寺
24	入江内湖遺跡	磯			

